



山田憲吾先生の ご逝去を悼みて

山本 博司

(高知医科大学整形外科)

山田憲吾先生ご略歴

生年月日 明治 44 年 9 月 1 日
本 籍 新潟県北蒲原郡中條町中條 1772
現 住 所 徳島市佐古七番町 1-24-9

昭和 4 年 3 月 新潟県立新発田中学校卒業
昭和 7 年 3 月 第三高等学校卒業
昭和 12 年 3 月 京都帝国大学医学部卒業
昭和 23 年 10 月 京都大学医学部講師
昭和 28 年 12 月 京都大学医学部助教授
昭和 29 年 9 月 徳島大学医学部教授
昭和 37 年 2 月 徳島大学医学部附属病院長
昭和 51 年 1 月 徳島大学学長
昭和 53 年 11 月 鳴門教育大学創設準備室長(併任)
昭和 54 年 1 月 徳島大学名誉教授
昭和 54 年 9 月 愛媛十全医療学院長
昭和 55 年 4 月 社会福祉法人有誠園顧問
昭和 56 年 11 月 玉造厚生年金病院長
昭和 58 年 4 月 愛媛十全医療学院長兼附属病院長
平成 2 年 1 月 19 日 ご逝去 (79 歳)

ご所属学会, 委員会等

日本整形外科学会会長
日本リハビリテーション医学会会長
日本パラプレジア医学会会長
日本側彎症学会会長
厚生省特別研究「動力義肢の実用化研究」班長
厚生省特別研究, 心身障害研究「進行性筋ジストロフィー症の臨床的研究」班長
厚生省神経疾患研究推進委員会委員
日本学校保健会脊柱側彎症委員会委員長
日本学校保健会姿勢と運動器委員会委員長
日本リハビリテーション医学会名誉会員

表 彰

昭和 44 年 3 月 科学技術庁長官賞「動力義肢」
受賞
昭和 58 年 4 月 勲二等瑞宝章受章

平成2年1月19日、山田憲吾先生が急逝された。当日の朝は、老人福祉施設にいつものように仕事に出られ、少し体の不調を訴えられて帰宅し、自室のベッドに静臥され、奥様が少し外に出られている間に、眠るがごとく昇天された。わずかに笑みを浮かべた「御仏」のように安らかな顔であった。beautiful lifeを全うされた先生らしいご成仏であった。ご家族の悲嘆もさることながら、先生を知るすべての人たちの驚きと悲しみであった。

山田憲吾先生は、昭和12年に京都帝国大学を卒業され、以来医師としての50年の長い間、いかなる時代にも、いかなる時にも、常に誠実に、真摯にお仕事に取り組み続けてきた。学者としては、豊かな発想と地道な努力を重ね、多くの独創性のある研究業績を残された。教育者としても、徳島大学の学長までお務めになられ、勲二等瑞宝章を受章された。実に心優しい医人であった。

先生とリハビリテーション医学との関わりは極めて深い。昭和48年には日本リハビリテーション医学会会長を、昭和49年には日本パラプレジア医学会会長を務められ、日本リハビリテーション医学会名誉会員の称号を与えられるとともに、学長職を退かれた後も、理学療法士育成機関の学院長として仕事をつづけられ、リハビリテーションセンターとしての玉造厚生年金病院の発展に尽くされ、そして老人福祉施設の長として、終生リハビリテーション医療に貢献されてきた。

リハビリテーションに関する先生のお仕事としては、特に2つのことがあげられる。その1つは、厚生省特別研究「動力義肢の実用化研究」の班長としてのお仕事である。妊婦のサリドマイド剤服用に伴うあざらし奇形児の出現という極めてショッキングな問題に対応するため、国の要請を受けて、上肢の欠落した患児を救うべく、動力義肢研究班を昭和43年に組織した。東京大学、京都大学、大阪大学、熊本大学、徳島大学、そして早稲田大学の医学および工学系の研究者で組織し、軽量で実用的機能的動力装具を開発し、上肢欠損児に交付することができた。この優れた技術開発と障害児への援助に対し、科学技術庁長官賞を受賞した。当時の研究は早稲田大学のグループらによる工業用ロボットとしての発展に繋がった。しかし、山田先生のリハビリテーション

における人間工学の理念は、生産性向上という労働科学と異なり、人間尊重という基盤に立つべきであると常に主張されていた。そして、人間系のハンディキャップを機械系によって補い、人間-機械系の合理的協調を求め、この協調が障害者の幸せに連るものでなければならないと話していた。

もう1つの重要なお仕事は、筋ジストロフィー症に対する臨床実践研究である。昭和39年から国立療養所における患児の治療、看護に着手されたが、昭和44年には「筋ジストロフィー症の臨床社会学的研究」班の班長としてこの方面の推進に尽力された。この研究班は、冲中班の基礎的研究と両輪のごとき関係にあるものであり、その内容としては、機能障害進展過程の分析研究、心理障害や生活指導に関する研究、療養機械器具に関する研究、看護に関する研究等を含むものである。筋ジストロフィー症の臨床医学研究のみならず、患者の全人的立場から養護の確立に貢献された。

この「動力義肢」と「筋ジストロフィー症」の研究は、野島元雄先生と協同して進められたが、その時代が昭和43年からであり、大学紛争のさなかで行われたものであり、苦労が多かったと思われる。それだけに、真摯に心優しいリハビリテーションのフィロソフィーを貫かれたものと思われる。

先生は79年の人生の歩みを「小さなメモ帳—私のあゆみ」と題した小冊子を残された。そのなかの「あとに続く人達のために」という一章の一部を紹介させていただく。

「深く思い、厚く思いやる」——自己は「思う」ことによって主観化され、その深みを増す。また、「思いやる」ことによって客観化され、自己は一段と拡大する。そして「思い、思いやる」ことによって共同体意識が醸成され、ここを起点に人類愛が展開される。「徳は孤ならず、必ず隣人あり」とか、自己完成への深い「思い」のなかに、厚く他を「思いやる」ならば、必ず良き隣人に恵まれ、人生の旅路はひととき心豊かで楽しいものになるであろう。

「深く思い、厚く思いやる」ことこそ、リハビリテーションの真髄ではなからうか。

「慈照院憲徳日吾居士」が故山田憲吾先生のご戒名である。ここに謹んで哀悼の誠を捧げ、ご冥福をお祈り申し上げる。